和平工作

和平への努力は、なぜ実をむすばなかったのか

黙殺されたつづけた和平工作

すでに戦力が底をついている現状から、戦争指導者たちはすぐにでも外交交渉による和平の道をもとめ、戦争終結をいそぐべきであった。だが、講和に有利な条件をひきだすためには、アメリカ軍に一撃をあたえることが必要とする考えが天皇をふくめ支配的となっていた。

それでも、戦争終結を念頭にすえた和平工作がまったくなかったわけではない。戦争継続を主張しつづけていた小磯内閣でも、じつは組閣と同時にひそかに重慶の中国国民政府とのあいだで和平工作を開始していた。それが通称「繆斌工作」[*1]とよばれるものである。

「繆斌工作」は、小磯内閣を総辞職までおいこむほど政局の争点となったが、それ以外の和平工作は敗戦間際まで続行されたものもあったものの、少数グループの動きにすぎず、政局を左右するほどにはいたらなかった。[*2]

それで戦争継続派の抵抗を排除しながら、和平工作が実効性をもつためには、どうしても天皇の関与を前提とする国家意思の発動として企画される必要があったのである。

その天皇が戦争終結に関心をしめしはじめるのは沖縄戦で日本軍の敗北がはや決定的となり、さらにドイツが連合国に無条件降伏する前後からである。これまで天皇が戦争終結を躊躇したのは、日本の敗戦後に連合国側からの要求が予想される、日本軍隊の全面的武装解除と戦争責任者処罰という二つの問題があったからである。だが、戦局悪化がすすむなかで、天皇の心境に変化があらわれる。[*3]

こうした天皇の心境の変化をうけて、最高戦争指導会議は、昭和20年5月14日の秘密会議で戦争終結工作の開始を決定。以後、本土決戦論のなかで和平工作は水面下で慎重に企画されていく。

和平工作の鍵にぎる天皇

ところが、和平工作による戦争終結を構想する一方で、徹底抗戦をよびかけたことは、和平

＊1　繆斌は南京政府（汪兆銘政権）の考試院副院長。小磯首相は繆斌を重慶政府との交渉の仲介役と期待したが、重光外相や杉山陸相、米内海相らが反対して失敗。

＊2　このほかにスウェーデン王室を仲介にイギリス王室との和平交渉を構想した駐スウェーデン公使館付武官小野寺信少将による「小野寺工作」、駐日スウェーデン公使ウイダー＝バッゲと駐スウェーデン公使岡本季正による「バッゲ工作」、さらにスイス駐在武官藤村義朗中佐による対米和平工作、通称「スイス和平工作」などがあった。

＊3　この点にふれ、天皇の側近で内大臣の木戸幸一は、「最近お気持ちが変わつた。二つの問題も已むを得ぬとのお気持ちになられた。早くと云つても時期があるが、結局は御判断を願う時期が近いうちにあると

工作が「国体護持」を目的としたもので、もっとも犠牲を強いられていた国民を救済する観点からすすめられたものではないことをしめすものであった。

本来の和平工作は、和平方針の具体案を集約し、国民的な課題としてとりくむべき性質のものであろう。しかしながら現実の和平への動きは、密室でひと握りのグループが個人的見解を表明するという域にとどまっていたのである。

戦争指導層の内部にも、和平工作実現の鍵は天皇にあることで一致していた。事実近衛文麿はこの件について、貴族院議員富田健治に、「鈴木総理木戸内府（内大臣）が纏まり、それより陛下の御決断がつけば、仮に陸軍の反対あるとするも押し切れるに非ざるかとの底意なり」[*4]とのべ、和平工作実現のためには天皇に決断をせまることが不可欠なことを強調していた。

そうなれば水面化ですすめられていた和平工作の動きに反発を強めていた陸軍にしても、これにしたがわざるをえないとの見通しをたてていたのである。より具体的な和平工作として、ソ連の対日参戦の脅威がせまりつつあった時期に、ソ連と交渉して連合国側との仲介役を依頼し、「和平」をすすめる構想が検討されはじめていた。

天皇は6月20日、東郷茂徳外相に対ソ交渉の促進を強く要請し[*5]、また、これより先に近衛文麿にソ連派遣特使への就任を要請していた。だが、ソ連政府は日本政府の働きかけをまったく無視する態度にでた。

それは、ヤルタ会談（一九四五年2月）でかわされた「秘密協定」で、ドイツ降伏の三か月後にソ連の対日参戦が明記されていたからである。参戦をきめていたソ連政府が日本の和平工作に関心をしめさないことは当然であった。「秘密協定」の内容を日本の戦争指導者がまったく把握していなかったことは、彼らの限界をしめすものといえよう。

こうした日本政府の対ソ交渉に、民衆のなかには「軍の独善専政並に作戦と外交の不一致が茲迄日本を追ひ込だ」とか、「正式声明も出来ない日本の外交はなつて居らぬ　道義外交の大失敗である　恵まれた機会は今迄あつたじやないか」と批判の声をあげる者がいた[*6]。対ソ交渉の限界がみごとに見透かされていたのである。

（纐纈　厚）

思ふ」と天皇の心境の変化を伝えている。また、秘書官長の松平康昌も、この時期に「御上よりも総理に戦争終結（外交）を考へてはどうかとの御言葉もあり」と証言している（「近衛公爵伝言覚　昭和二〇年五月一三日の項」防衛庁防衛研究所戦史部図書館蔵「高木惣吉資料　秘録抜粋」所収、未刊行資料）。

＊4　「富田貴族院議員連絡　昭和二〇年五月九日項」（同前所収）。

＊5　外務省編『終戦史録3』北洋社、一九七七。

＊6　栗屋憲太郎・川島高峰編集解説『国際検察局押収重要文書①　敗戦時全国治安情報』第7巻、日本図書センター、一九九四（福岡県の事例）。